

令和元年6月11日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16727

研究課題名(和文) 解放期「朝鮮演劇」のアイデンティティ再構築に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A Study on the Reconstruction of Identity in Korean Drama during the Post-Liberation Period

研究代表者

金 牡蘭 (KIM, MORAN)

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・准教授(任期付)

研究者番号：90732941

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1940年代後半の朝鮮半島における演劇をめぐる言説が、独立以前に形成された朝鮮演劇のアイデンティティをどのように再構築してゆくのかを明らかにしようとする試みである。帝国日本の標榜する「大東亜演劇」としてその役割を割り当てられていた「朝鮮演劇」は、独立後に新たな自己規定を必要とした。本研究は、それに際して朝鮮の演劇人たちが植民地下の「朝鮮演劇」とそれをめぐる言説とをいかに評価し、その継承/断絶を目論んだのかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年韓国においては解放期(1940年代後半)の研究が盛んに行われており、演劇分野においても、植民地期との時間的な断絶や北朝鮮と韓国という空間的な断絶にとらわれない研究が多く登場している。しかし、それらの研究において朝鮮の演劇的伝統の問題は注目されてこなかったと言える。本研究は、演劇的な伝統をめぐる言説や、朝鮮の演劇遺産を継承した舞台などに焦点を当て、解放期の朝鮮演劇の諸相を見直すことで、既存の研究の欠落を埋めることができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to reveal how the discourses on Korean drama reconstructed the identity of Koreanness during the post-Liberation period. Under the Japanese imperial rule Korean drama played a role of "Daitoa Engeki", but after the Liberation it needed to update its identity in the course of reinventing the Korean national culture. This study observed 1)how people involed in the theater evaluated the discourses on Korean drama accumulated in the colonial period, 2)how they marked dis/continuity between the period before and after the Liberation.

研究分野：朝鮮半島の近代演劇

キーワード：朝鮮演劇 演劇的伝統 演劇遺産 解放期 唱劇

1. 研究開始当初の背景

1940年代後半の解放期は朝鮮半島で新たな民族国家と民族文化をめぐる多様な模索が行われた時期であり、現在の韓国・北朝鮮社会の起源が求められるべき時期である。それと同時に先行研究（たとえば、クォン・ミョンア『植民地以降を思惟する 脱植民化と再植民化の境界』2009、チョン・ジョンヒョン『帝国の記憶と専有 1940年代韓国文学の連続と非連続』2012）が指摘しているように、解放期における新生朝鮮の建設をめぐる多様な企画は、植民地／帝国の経験という文化的遺産の延長線上で探究されたものでもある。その意味において、解放期における民族文化の建設をめぐる研究は、必然的に「暗黒期」における朝鮮文芸の経験、さらにはそれ以前の1930年代の朝鮮文芸に認められる朝鮮的なものの探究という企画にまで遡らなければならない。

解放期の研究においては、こうした時間的な連続性だけでなく、空間的な連続性にも留意する必要がある。後の政治体制が未だ確立していなかった1940年代後半という混乱期の特徴を考慮するならば、現在の境界による区分に依拠するのではなく、韓国・北朝鮮・日本における動向を同時に比較・検討することが、総合的な理解のためには不可欠であるからだ。このような認識の下、近年の韓国では北朝鮮地域の資料発掘が多方面で行われてきた。演劇に関して、米国の国立公文書館における朝鮮戦争時の北朝鮮地域鹵獲文書や中国の延辺大学、ロシアの国立図書館の資料から多くの劇作品が発掘・収集され、『解放期南北韓劇文学選集1・2』（2012）が出版されるに至った。しかしながら、韓国演劇における伝統の問題を通時的に分析したベク・ヒョンミの大著『韓国演劇史と伝統言説』（2009）において、解放期だけが空白として残されていることが象徴的に語るように、解放期の研究における時間的・空間的な断絶を解消するためには、多くの課題が残されていた。

2. 研究の目的

本研究は、上で述べたような解放期研究の現況を十分に認識しながら、朝鮮演劇のアイデンティティをめぐる言説の変遷を分析することで、既存の研究における時間的・空間的な断絶を解消することを目指した。植民地期に対する研究者のそれまでの研究成果を踏まえながら、独立後における言説にまで視野を広げ、それらがどのように独立以前の朝鮮演劇のアイデンティティを継承し、またそこからの脱却を図ったかを明らかにしようとしたのである。

そのために本研究は、以下に示す二つにわけて調査研究を行った。解放期の朝鮮において植民地期に形成された朝鮮演劇の伝統に関する認識がどのように評価され、どのように更新されたかについて調査した。そもそも植民地期の朝鮮および帝国日本で単行本の形でまとめられた朝鮮演劇史の記述はその数が多くはない。代表的なもので金在喆『朝鮮演劇史』（1933）、鄭魯湜『朝鮮唱劇史』（1940）、印南高一『朝鮮の演劇』（1944）を挙げることが出来るが、これらの著述のほとんどは古典劇に関する内容であり、植民地期の優先的課題は何よりも朝鮮演劇の伝統を構築することであったことが分かる。本研究では、独立後における朝鮮演劇関連の言説の中でも、主にこの演劇的な伝統の問題に焦点を当ててその継承の様子を分析した。朝鮮の演劇の伝統と関連した舞台の例として唱劇の公演状況とそれをめぐる言説について調査した。唱劇は近代以前の演芸ジャンルであるパンソリが近代演劇との接触の中で変形することで発生し、1930年代に典型化を見たジャンルである。本研究では、唱劇が1940年代前半の国民演劇期を経て、解放期においても活発に上演されていたことに注目し、唱劇における連続／断絶の問題を主に考察した。

3. 研究の方法

本研究は次の作業を軸に展開された。

朝鮮半島の解放期における朝鮮演劇のアイデンティティ関連記述の発掘と読解

国民演劇期（1940年代前半）と解放期（1940年代後半）における唱劇公演の状況およびその演目に関する調査

植民地期との比較に基づいた、解放期の「朝鮮演劇」のアイデンティティ再構築に関する考察

4. 研究成果

解放期の朝鮮演劇が置かれた環境を広く調べ、解放期演劇が、その内容や技術だけではなく、演劇をめぐる諸環境（組織、劇場、用語、演劇運動の方法など）の面でも、植民地期の演劇との間に様々な連続性を見せていることを明らかにした。

解放期における朝鮮演劇の再出発においては、朝鮮の演劇的な伝統の問題は本格的に議論されることはなかったが、その中でも朝鮮の演劇遺産の問題にこだわった人物として韓暎に着目し、彼の「演劇伝統論」および『朝鮮演劇史概要』（1956）を分析した。また、韓暎の伝統論を植民地期の演劇史記述と比較検討することで、その意義を明らかにした。

国民演劇期および解放期における唱劇公演の連続性を分析することで、解放期の唱劇が朝鮮

の演劇的伝統として持ちえた可能性とその限界を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 4件)

- 1) KIM Moran, “The Reconstruction of Identity in Korean Drama during the Post-Liberation Period: the Case of Chang-geuk”, International Workshop for Korean Literature Studies : Writing and Subjectivity in Contemporary Korean Literature, UC Berkeley, March 2019.
- 2) 金牡蘭、「解放期の朝鮮演劇における演劇的伝統の再構築」, 朝鮮学会、早稲田大学、2017年10月.
- 3) KIM Moran, “Continuity and Discontinuity: Korean Drama in the Liberation Period”, Korean Studies Lab Conference: Korean Literature, Language and History, UBC, March 2016.
- 4) 金牡蘭、「咸世徳『舞衣島紀行』再考」, 植民地朝鮮の文学・文化と言説空間、福岡大学、2015年7月.

〔図書〕(計 1件)

- 1) 金牡蘭、笹山敬輔・松田幸子・姚紅編『異文化理解とパフォーマンス』, 春風社、2016年.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。